

# John Singleton, Central Banking in the Twentieth Century

著者	佐藤 純
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	52
号	8
ページ	67-70
発行年	2011-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00040676">http://doi.org/10.20561/00040676</a>

John Singleton,

*Central Banking in the  
Twentieth Century.*

Cambridge: Cambridge University Press,

2011, xii + 337pp.

さとう じゅん  
佐藤 純

I はじめに

本書の著者シングルトン氏は、シェフィールド・ハラム大学 (Sheffield Hallam University) 歴史学科の上級講師であり、経済・経営史が専門である。同大学のホームページによると<sup>(註1)</sup>、18世紀から現代にいたるまでのイギリスを中心とする国際経済史を専門とし、イギリス帝国の発展と金融・経済危機が教育のトピックであるという。また、イギリス綿産業、イギリスのナショナリズム、イギリスとオーストラリア、ニュージーランドとの経済関係に関する著書もあり<sup>(註2)</sup>、同氏が研究対象とする分野は広範にわたる。

さて、同氏の最新の著書である本書は、20世紀における中央銀行、あるいはセントラル・バンキング発展の歴史を概観したものであり、中央銀行の業務に関する理論的な著書ではない。したがって、経済学の基本的知識をもっていれば誰でも通読可能であり、我々の社会生活の基本である通貨を独占的に発行するという強大な権限をもっている中央銀行に関して、基本的知識と理解を得たいという方々に、ぜひ推薦したい書物である。まずは、本書の構成を示しておきたい。

第1章 セントラル・バンキングの初心者へのガイド

第2章 非常に退屈な人々？

第3章 「ウィンド・イン・ザ・ウィロウズ」  
——1900年頃のセントラル・バンキング  
の小さな世界——

第4章 みんなのためのもの——新しい中央銀行、  
1900-1939年——

第5章 災難の連続——セントラル・バンキング、  
1914-1939年——

第6章 中央銀行間協力の謎

第7章 セントラル・バンキングの最初の革命

第8章 大思想家の時代の終わり——「ケインジ  
アン」時代におけるセントラル・バン  
キング——

第9章 プレトン・ウッズ時代における中央銀行  
間協力の再燃

第10章 金の卵を産むガチョウ——開発途上国に  
おけるセントラル・バンキング——

第11章 インフレーションの馬

第12章 第2のセントラル・バンキング革命——  
独立性とアカウンタビリティ——

第13章 名声がかかっている——金融の規制緩和  
と不安定——

第14章 インフレ・ターゲット政策  
——聖杯？——

第15章 ヨーロッパ通貨統合への長い行進

第16章 50万人のセントラル・バンカーの時代

II 各章の概要

以下で各章を概観していきたい。

第1章のタイトルは、「セントラル・バンキングの初心者へのガイド」となっている。ここで、本書の目的は、通貨発行の独占権という強大な権力をもっている中央銀行という機関の「神秘のベールを取り去ること」(demystification)であるとされる。そして、本書の検討の焦点は、特に、セントラル・バンキングの2度の革命、第1は1930~40年代、第2は1980~90年代、にあると述べられている。

第2章は、セントラル・バンカーの仕事に関して論じられている。セントラル・バンカーは、1900年においては、非常に特殊なタイプの銀行家であり、1950年までには、銀行家であると同時に公僕である必要があった。そして、2000年において、セントラル・バンカーは、銀行業、経済学、公共政策に通じた人物である必要があるという。かかる変化は、上述の2度の革命によってもたらされた。したがって、セントラル・バンカーは「非常に退屈な人々」であってはならず、セントラル・バンキングにおける個人、具体的には総裁の役割が非常に大きいことが示唆さ

れている。

第3章は、1900年前後頃のセントラル・バンキングの「小さな」世界について説明している。具体的には、当時、世界の主要な中央銀行であったイングランド銀行、フランス銀行、ライヒスバンク、そして日本銀行の簡単な歴史を概説した後に、国際金本位制下の主要中央銀行の役割について論じられている。それによると、国際金本位制が円滑に機能していたゆえに、中央銀行は反循環政策や失業対策において主導権を発揮する必要はなく、またその独立性をめぐって政府と争う必要もなかったという。

第4章は、1900～39年における世界各国における中央銀行の創設に関して論じている。具体的には、アメリカの連邦準備制度、ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、イギリス自治領諸国における中央銀行の起源について概観している。それを踏まえ、イングランド銀行総裁ノーマン (M. Norman) やニューヨーク連邦準備銀行総裁ストロング (B. Strong) にとって中央銀行は、金、ポンド、ドルに対する固定為替相場に依拠したりベラルな資本主義システムに対して、可能な限り多くの国を結びつけるための機関であった一方、自治領・植民地諸国にとっては、国家の発展や自治を象徴するものであったと論じられている。

第5章においては、両大戦間期において、中央銀行が、ケインズ理論の登場や1929年恐慌の発生によって、その存在意義が問われていく様が描かれている。ケインズは、従来の中央銀行が護持してきた金本位制を「野蛮な遺物」、あるいは「時代遅れの教義」として完膚なきまでに批判する一方で、財政政策の重要性を説いた。そして、1930年代大不況期にケインズ政策が成果をあげていくなかで、中央銀行は、経済政策の主導権を握った政府との関係を重視せざるをえなくなり、その独立性を奪われていくことになったという。

第6章のテーマは、両大戦間期における中央銀行間協力である。ノーマンやストロングによって主導された中央銀行間協力は、1920年代における通貨の安定や、新しい中央銀行の創設などの成果をあげたが、その目的において大きな誤りがあったという。著者は、中央銀行間協力を担った人々は、金本位制の護持に執着するのではなく、金融政策の緩和、具体的には通貨供給を増やすという方向で協調すべき

であったと主張している。結局、かかる失策によって、中央銀行はその存在意義を問われることになるのである。

第7章は、セントラル・バンキングの第1の革命に関して論じられている。先述のように、1930年代大不況期において大きな役割を果たしたのは、中央銀行ではなく、ケインズ理論に裏打ちされた政府の財政政策であった。中央銀行はもはや金本位制の護持者たることを止め、政府の主導するマクロ経済政策を側面から補助する役割を果たしていく。しかし、一方でこの当時の中央銀行は、決して政府のための通貨発行機関になったわけではなく、主体的に政府とのパートナーシップを構築しようと努めたという。

第8章は、セントラル・バンキングの第1の革命の結果、主に先進国の中央銀行の業務内容がいかに変化したのかを記している。この時期、中央銀行は政府との協力の下で、両大戦間期において主流を占めた公定歩合政策に加え、預金準備率操作や公開市場操作などの手段を用いて、より効率的な金融政策を遂行するようになったという。さらに、中央銀行は、為替管理、市中銀行に対する指導、そして統計・経済に関する研究などの新しい業務も担うようになり、公共機関としての存在感を増していく。このように、先進国の中央銀行は、両大戦間期に果たしていた機能・役割を深化・改革することによって、1960年代末までインフレの発生を抑えることに成功したのである。

第9章は、ブレトン・ウッズ体制下の中央銀行について論じられている。ブレトン・ウッズ会議において、ケインズ案とホワイト案が対立したことは有名であるが、前者は中央銀行に、後者は政府や財務省に大きな役割を期待する案であったという議論が展開されている。そして、最終的には両大戦間期における中央銀行の無策を理由として、アメリカ財務省のホワイト案が採用され、1940～50年代に中央銀行の存在意義は史上最低のレベルにまで落ち込んだという。

第10章は、発展途上国におけるセントラル・バンキングについて論じられている。両大戦間期から1960年代までの間に、多くの発展途上国において中央銀行が創設されていく。しかし、それらの中央銀行は、経済成長を牽引した場合と、政府の傀儡として、財政赤字の穴埋めのための無規律な通貨発行に

よって、国民経済に大きなダメージを与えた場合があった。このように、発展途上国の中央銀行はいわば「諸刃の剣」であったと論じられている。

第11章においては、1960～80年代のインフレーションの時代に、中央銀行が再びその威信を取り戻していく様が描かれている。当初、日本、イギリス、アメリカ、西ドイツなどにおいては、インフレーションは深刻な問題とは認識されておらず、1970年代になってようやく完全雇用や経済成長よりも、インフレーションの抑制が重要であることが政策担当者によって認識されるようになった。その結果、中央銀行は経済政策の策定・遂行において重要な位置づけを与えられるようになっていく。

第12章では、第2のセントラル・バンキングの革命について論じられている。著者によると、「中央銀行の独立性」(central bank independence: CBI)とインフレ・ターゲットが、1980～90年代に起きた第2の革命の2つの柱であったが、本章では、前者に関して論じられている。中央銀行はインフレーション対策において主導的役割を果たすことに成功した結果、CBIを保証されることになったという。そして、中央銀行は1990年代において、1920年代以降、もっとも高い威厳と影響力をもつことになったと論じられている。

第13章は、20世紀の最終四半世紀における金融自由化の時代における中央銀行のあり方について論じられている。金融分野における規制緩和の結果、世界各国は銀行および通貨両面の危機＝「双子の危機」(twin crises)に度々見舞われることとなった。その際、中央銀行はブルーデンス政策 (prudence policy) によってそれを抑制する責任があったと論じられている。本章で、著者は、結局は納税者の負担へと帰結する銀行・通貨危機を、中央銀行は積極的に抑えるべきであると訴えている。

第14章は、1990年代以降、世界各国で採用されるようになったインフレ目標政策に関して論じている。2004年までに、世界の4分の1が同政策を公式に導入している。さらに、ヨーロッパ中央銀行やアメリカ連邦準備制度も実質的には同政策を実施しているという。しかしながら、著者は、この政策は、1970～80年代のインフレーションを振り返ることによって立案された「後ろ向きの枠組み」(backward-looking framework)であり、2007～09

年の銀行危機に対しては有効でなかったとしている。

第15章は、ヨーロッパの通貨統合の歴史を、中央銀行間協力の視点から描いている。そのなかで、ヨーロッパ諸国の中央銀行は通貨統合において主導的な役割を果たしたこと、そしてそのプロセスのなかでお互いの絆を強めていったことが指摘されている。著者は、ヨーロッパ中央銀行 (European Central Bank) は、EU諸国の政府からの独立性を保ちつつ、様々な金融政策を柔軟に実行することに成功しているとしている。しかしながら、ベルギーとポルトガルのように、経済体質がまったく異なる諸国を包摂する通貨同盟が、果たして長期的に成功するか否かは、いまだ不明であるという見解も同時に示されている。

第16章においては、これまでの検討が総括され結論が述べられている。それによると、セントラル・バンキングは、金融・経済危機に十分に対処できないこともあったが、2度の革命を経ることによって様々な機能を備えた強力な機関となったという。中央銀行は他の政府系機関・企業とは異なり、政府から資金の拠出を求める必要がなく、グローバルな金融危機への取り組みなどの野心的な事業を、企業家精神を大いに発揮し、大胆に遂行しているという。一方で、中央銀行は、ブレトン・ウッズ体制の全盛期のような逆風時においては、「中央銀行の独立性」を容赦なく放棄するなどプラグマティックな対応を行いその存続に努めてきた。このように、著者は、中央銀行は強靱な生命力をもっていることを強調し、本書を閉じている。

### Ⅲ おわりに

以上、本書の内容を章ごとに紹介してきた。本書は、金融政策に関する新しい理論を提起したものではなく、一次史料に基づいて新事実を発掘したものでもない。先行研究を手際よくまとめ、いくつかのトピックについて叙述したものにすぎず、セントラル・バンキングを専門とする研究者にとっては、物足りない内容であるかもしれない。しかし、セントラル・バンキングの業務や理論に関する著書は多数存在するが、セントラル・バンキングの発展史や世界の中央銀行の機能や特質について概観した書物は非常に少なく<sup>(註3)</sup>、その意味で本書は貴重であると

いえる。

また、本書には随所に興味をそそるエピソードがちりばめられ、各章の冒頭で目的が、末尾には「結論」が明示されており、これらを流し読みするだけで全体の内容が把握できるようになっている。中央銀行は謎のベールに包まれてきたがゆえに、陰謀論めいた著書も沢山ある。しかし、本書は、中央銀行の「謎解き」を、高度な学問的水準を保ちつつ、専門知識をもたない読者に対しても、興味をそそるように、わかりやすく行うことに成功している。セントラル・バンキングは一部の専門家の「秘儀」にしてはならず、我々国民の誰もが基本的知識をもつように努める必要があると考える。本書ができるだけ多くの人々に読まれることを期待したい。

(注1) シェフィールド・ハーラム大学の以下のホームページを2011年3月16日閲覧。

<http://www.shu.ac.uk/prospectus/mediabox-item/356-870/course/142/>

(注2) シングルトン氏は本書を出版する前に、ニュージーランド準備銀行に関する著書も記している。

Singleton (2006) を参照されたい。

(注3) 田尻 (1999) は、世界各国の中央銀行に関して概説した貴重な日本語文献である。

### 文献リスト

#### <日本語文献>

田尻嗣夫 1999.『世界の中央銀行——金融法王庁の内幕——』日本経済新聞社.

#### <英語文献>

Singleton, John et al. 2006. *Innovation and Independence: The Reserve Bank of New Zealand, 1973-2004*. Auckland: Auckland University Press.

(八戸工業高等専門学校准教授)